



史傳

野村望東尼 (つづき)

下村三四吉

いつしか秋は深くなり行けど、望東尼の幽囚は
 なほ解かるべくもあらず。この間、訟廷に呼ばれ
 て糾問を受くること、たび重なりぬ。「わがうへは
 わからさまにもいふべきを、人のうへこそ、いか
 にこたへめ」との一方ならぬ苦慮は、いふもさら
 なり、

御國のみたてにもなるべき男子どもは、ゆるさ
 せたまひて、あるかひもなき老の身ひとつに、
 よろづおふせたまはらば、老の思ひでになど、

けいしてかへりたれば、

もののおもにのつみを身ひとつに

おひて軽くもなる命かな

とて、自ら一身を犠牲に供して憂國の志士を庇護
 せんとしたるに至りては、その操持の清高堅固に
 して、忠愛義侠の風に富める、實に欽慕すべし。
 死生の際に處して惑はず、泰然として安んじ、緯
 々として餘裕あるは、平素の涵養なくして、いか
 で此の境に達し得べけんや。

草むらにすだく蟲の音は、夜毎にかれまさり、
 哀しさをとりあつめたる秋も、やうく暮れなん
 どす。望東尼の懇切なるころしらひのかひもな
 く、加藤、月形、建部、筑紫等十數名の志士は、つ
 ひに處刑せられて亡き人の數に入り、家に幽せら
 れし、尼の孫助作は、更に獄に投せられぬ。

家にてめられしおとうまごさへ、よべごとくやに引かれて、おしめられつとつげこしこそ、夢の中の夢とのみくれまどひ、ものもればえず、たいつらき老の命のみうらめしくて、

かひもなき古葉のこして、うすくこく、

そむる紅葉をちらす山風

などいひなきしたるに、はたひきかさねて、先に獄屋にもせられしますらをたち十よたりかなじよにいのちさへどられつとはのきくに、いけるこちもせず、……こぼるゝをもせきさわへねば、たい引かゝふりて、ふしたれど、今は人の上かはど、こころひきなほして、ひとしらすこころやういなごしつゝ、……

嗚呼、尼の心事察するに餘りあり。

正義の志士どもが獄定りて嚴刑に處せられしと

共に、これ等の人々に交はり、且つ平尾の山莊をそが密議または潜匿の場處となせりし尼が所爲は婦人にあるまじき行なりしとて死刑にも處せらるべかりしを、特別のとりあつかひにて、姫島へ流す旨の宣告は下れり。尼の家人は、哀しさの念に堪へず、よめなる人一夜忍びやかに、尼のもとに來りて、離別の情を叙しぬ。この間の情狀縷述するに忍びかぬれば、今はたゞ讀者のあつき同情にまかせん。

抑も、姫島といへるは、筑前國志摩郡に屬し、福岡を距ること海程十里ばかりなる一孤島なり。尼はこれに流され、孫助作は玄界島に流さるべく定まりぬ。祖孫處を異にして、同じく流竄の危禍にあへる、何等酸鼻の事ぞや。

けふは、なき間といへども、冬海のくせにや、

いと浪たかく、ゆられゆくに、姫島ちかづくま
いに、しほあさく、若しげうやあらん、なみの
うねく、舟をつつみわるばかりたかければ、皆
こちあしげにぞなれる。立石崎のはなを出づ
るより、おどろくしきまで、うきしづめば、
いみじう心地あしげになりて、臥したる間に、
舟はやはてぬといふにおどろきて、

あらか渡のうきせくは、越えつれど、

なほうらめしき住居こそせめ

さて警固の侍に導かれて、海岸の小丘に立てる牢
獄に至れば、

さてそこに行き見るに、家にてきしどはかは
り、疊もなく、板敷にて、いどいかめしき人や
なりけり。こは江上ぬしが入りにし故郷と見る
ぞ、こどにいみじうあじきなし。いかなるゑに

しにて、かくはと思ふさへぞはかなき。……
實に「うらめしき住居」は、更にこれより始まらん
とはするなり。

住をむる、ひとやの枕、うちつけに

さけぶばかりの波の聲かな

波濤岸に激して心胸をうち、寒風戸隙より入り
て肌をさす。長さ夜も、親しむべき燈火さへ許さ

れねば、こゝろまざれんやうもなし。たゞびどにて
も堪へがたきを、六十衰殘の身を以て、この困苦
厄難どたたかひて屈せず、却て安心立命の地をこ
の間に求め來り、日夕の感懷を和歌に寄せて、悠
然として自適せり。その壯烈、その安祥、ゆかし
どもゆかし。

なかくくに、ねやのくらぎに、なれしより
心のやみは、さりげなるかな

この孤島の牢獄にありし間の事なり。望東尼は

正義派諸志士の不幸の死を悼み、悲哀の情禁ずる

こと能はず、小刀にて已が指頭を刺し、かれく

の血をしぼりつゝ、そをもて般若心經を寫し、自

詠の和歌を添へて、密に月形、建部等諸士の遺族

へ送り、靈前の手向となしき。指頭を刺して血判

をなすことは、武家時代にはめづらしからぬこと

なれど、血もて幾數部の般若心經をうつせるは、

實に非常の例にして、「心血を瀉ぐ」の語、ここに

至りて、形容詞にはあらず。尼の遭遇せりし境遇

及びその情操信念想ふべきにあらずや。血寫心經

の末に添へられし二首の和歌左に、

おくれ居て、書くもかひなし、法のふみ
よみかへりこんつてならなくに

御世のため、心つくしの、ものよの

命にかはるわが身なりけり

是より先、高杉晋作は、既に濇論を一定し、幕

府再度の征討軍をも討ち退けて、長州兵馬の事を

管し、聲威甚だ隆んなり。晋作、たましく、望東尼

が不幸にも流罪に處せられ、姫島の獄舎に投ぜら

れ居ることを聞きて、いたく驚き、已れはかつて

尼の厚恩を被ふりしが、そのために老年婦人の身

を以て、孤島の獄中に苦められることは、實に捨

てかき難き儀なりとて、これを救はんと欲し、陰

に筑前の浪士小寺幸兵衛等その他部下の數士に謀

を授け、小船に乗じ肥筑の沿岸を往來して、その

機を伺はしめぬ。幸兵衛等終に姫島に上陸し、望

東尼の囚はれたる獄舎に至り、鑰を破りて内に入

り、尼を掖けて出で走り、からくも成卒の追躡を
免れて、恙なく下關に歸航せり。

實に慶應二年九月にして、望東がこの鳥獄に幽せられしより、凡そ一年に近かりき。晋作自ら出でて、望東を迎へ、その手を執りて、舊恩の渥さを謝し、辛酸の甚しかりしを慰めしが、尼も亦悲喜こもく至りて、殆ど言ふところを知らざりき。

かくすればかくなるものと知りながら止むに止まれぬ大和魂

吉田松隆

ローランド夫人の傳(ついで)

鄭越生補譯

斯くて夫人はかもへらく、我幸にまのあたり、身に迫りつる厄難を、免れたれど一滴の、温き血漿も一點の、涙もあらぬ蛇か鬼か、人の情もひとして、絶へて知らざるのみならず、理否の差別も白すぎの、直き心の忠良を、國賊といひ亂倫を、

人の自由とかもひなし、白を息とし後をは、前とし狂ひ狂ひたる、敵黨輩のことなれば、いつといふ時の定めなく、又何といふ冤罪を、云ひ構へて訊鞠し、竟には非道の罪名に、陥れんも知れされば、やがて時運の回歸して、敵の眠りの覺めたらん、時機をば待ちて徐に、此大抱負を實行し、世の人々を濟はんかな、此身一つは數ならず、露おしどにはあらねども、道のためなり世のために、しばしなりともながらへん、左なりくど是よりは、門の守衛を嚴にして、世の趨勢を一向に、觀望してぞありたりける。

さるほどに、山嶽黨の人々は、心ならずもひとたびは、夫人を釋放したれども、彼等夫妻とそのまゝに、のこしかかはんは猶虎を、山野に放くに異ならず、どにもかくにもからめどり、陥れんに若